

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 河内山 晶子

本論文「日本人英語学習者の自律的学習モデルの構築とその展望—学習者の特徴により学習プロセスにはどのような違いがあるか—」は、日本語母語の英語学習者に潜在する、情意を含む動機、メタ認知方略、認知方略、語学力との関係をモデル化し、自律した学習者育成を目指して英語教育現場への応用も視野に入れた研究である。

論文は全 9 章から成る。第 1 章「本研究の位置づけおよび概要」では、英語学習の動機づけに関する第二言語習得研究において本研究がどのような位置を占めるかを論じ、自律学習を促す要因の解明の意義を論じた上で、本研究の概要を述べている。

第 2 章「本研究の背景」では、現在の英語教育の社会的背景とともに、本研究のきっかけとなった先行研究、具体的には河内山（2001）の研究成果と残された課題を論じ、それが本研究へと発展した経緯を述べている。

第 3 章「先行研究」では、学習者の自律の定義と関連する先行研究を概観し、学習者自律の構成要因として「方略的」要因群と「動機づけ的」要因群とを区別し、方略的要因群を「認知方略」と「メタ認知方略」に、また動機づけ要因群を「動機づけの要因」と「情意要因」とに分け、それぞれの先行研究を概観した。特に、本研究の研究目的である、動機づけ的要因群と方略的要因群との関係の解明に関する先行研究として Pintrich 他(1990、1996)、堀野他（1997）、Inagaki(2009)を取り上げ、その研究の詳細と結果、及び問題点を論じている。

第 4 章「本研究の枠組みと目的」では、第 3 章で論じた先行研究の成果をふまえて、本研究の枠組みとして、動機づけ、情意、メタ認知方略、認知方略、能力を関連づける自律学習モデルの大枠を仮定した。本研究の目的を①自律的学習モデルの構築と②自律的学習者要因の能力別の差異化の検討とし、目的①のために、自律学習モデルの因子に関して、研究課題（以下 RQ（リサーチクエスション）と記述する）を 3 つ提示している。それらは、RQ1:「認知方略」と「英語能力」の間で特徴的な関係はどれか、RQ2:「メタ認知方略」と「認知方略」の間で特徴的な関係はどれか、RQ3:「動機づけ・情意要因」と「メタ認知方略」の間で特徴的な関係はどれか、である。また、目的②のために、RQ4: 学習者要因が個々の学習者の英語学習プロセスをどのように差異化するか、を設定した。

第 5 章「実験」では、実験方法を詳述している。学習者の英語能力を英検の能力判定テストで判定し、学習者要因を質問紙で測定した。また、調査対象者は関東地区の私立大学 1 年 804 名、その英語能力水準は主に英検準 2 級・3 級・4 級で、実施期間は平成 21 年 4 月からの 1 年間であった。

第 6 章「自律的学習モデルの構築」では、収集したデータの因子分析の結果をもとに因子を抽出した。まず、学習者の能力要因を語彙、作文、読解、聴解

別に測定し、因子も語彙力、作文力、読解力、聴解力の4因子とした。学習者要因については、動機づけ要因からは7因子、情意要因からは3因子、メタ認知方略から3因子、認知方略から3因子、合計16因子を特定した。RQ1からRQ3の解明のために、これらの因子間を結ぶ関係線（パス）51本について、特徴あるパスを選ぶために、共分散構造分析を用いた結果、学習モデルの大枠の中で、27本のパスが選択され、本研究の学習モデルが構築された。

第7章「構築したモデルによる様々な分析」では、第6章で得られたモデルを使ってRQ4、すなわち学習者の特徴により学習プロセスにどのような違いがあるか、を分析した。習熟度別に英語総合力、語彙力、作文力、読解力、聴解力を当てはめ、次に成績変化別に上昇群・下降群を当てはめて、その違いを分析した。さらに、学習者要因の16因子を中心に、学習者を、上位群、中位群・下位群別に分けて、学習プロセスの特徴の違いを分析した。

第8章「考察」では、第6章と第7章の研究結果の考察と結論、及び、今後の展望が論じられている。研究結果の考察には、統計処理に基づく量的な分析だけでなく、質問紙による質的データの分析も行っている。今後の展望としては、特に本研究の結果が教育実践にどのように結び付けられるかについて、教師によるカルテシートの活用、個人面接指導案の提示、ポートフォリオとしての利用など、具体的な教授法の提案がなされている。

以上が本論文の概要である。本研究の学術的意義については、以下の審査結果が得られた。

第一に、第二言語習得、とりわけ、日本語母語の英語学習者に求められる自律学習に関して、学習者要因の詳細な分析に基づいた自律学習モデルの提案を試みた研究は少なく、その意味で、本研究の当該研究領域への貢献と学問的意義は大きいこと。

第二に、構築した自律学習モデルによって、学習者の言語能力別による差だけでなく、言語能力に関わらず、実験を行った1年の間に成績が上昇した学習者群と下降した学習者群の差異化が可能であることを示したこと。

第三に、学習者要因に応じた学習プロセスの差異化が実際の教育現場で応用可能であることを具体的に論じたこと。

これらの点は、委員会委員より高く評価された。今後、著者の教育実践をもとにした研究成果が大いに期待される。

とはいえ、改善の余地がないわけではない。審査では、いくつかの指摘がなされた。まず、学習モデルの精密な記述と教育現場での実用化の議論にはまだ隔たりがあること、教育現場での応用を考えるには、提示された学習モデルの簡略化が必要となるのではないかということ、また、教育現場では、学習者要因だけでなく、教師の信念（teacher belief）も考慮に入れる必要があること、さらに、本研究が提示した自律学習モデルは、学習一般についても適用可能なのではないか、そうだとすると、このモデルが英語学習に特化した部分はどの部分か、などである。しかし、これらの指摘は、本研究の根幹を左右するようなものではなく、また多くは著者の将来の研鑽に期すべきことがらであり、本

論文の大きな学術的貢献をいささかも損なうものではない。

以上の理由により、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。

最 終 試 験 の 結 果 の 要 旨

論文提出者氏名 河内山 晶子

本審査委員会は、平成24年6月1日に論文提出者に対し、学位請求論文の内容および専攻分野に関する学識について口頭による試験を行った。

その結果、論文提出者は博士（学術）の学位を受けるにふさわしい十分な学識を有するものと認め、審査委員全員により合格と判定した。